

# 居留地貿易と鈴木商店

2017年9月9日（土）

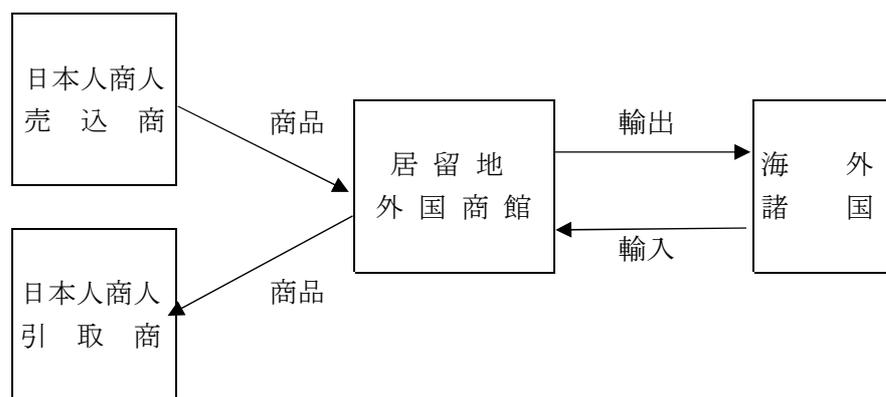
神木哲男

## I はじめに

## II 居留地貿易

### 居留地貿易とは

1. 通商条約に基づき設定された各開港場の外国人居留地において外国人と日本人との間で行われた貿易取引
2. 通商条約では、外国人の国内旅行・通商権が認められておらず、外国人の活動範囲はほぼ居留地内に限られ、居留地に来る日本人との間の取引に限定
3. 海外に関する圧倒的な知識・情報を持つ外国人が、取引に際して常に有利な立場を維持
4. 外国人の自由な旅行と通商権の不承認による、外国人の国内産業支配を防ぐことが可能



## III 砂糖の歴史

### 江戸時代

- ・輸入品としての砂糖＝1623年、琉球王国の儀間真常（琉球王国の士族、殖産家）が、領地・儀間村の者を明の福州に派遣してサトウキビの栽培と黒糖の製法を学ばせ、砂糖生産を奨励、琉球の特産品となる → 薩摩藩による琉球支配（1609年）後、琉球黒糖は薩摩藩の財政を支える産物となる

- ・8代将軍吉宗による国産奨励 → 高松藩・丸亀藩などによる国産砂糖の生産始まる → 和三盆の開発に成功(高松藩)
- ・砂糖流通の中心・大坂：輸入品(唐紅毛糖)＝唐菓種問屋、薩摩黒糖＝薩摩問屋、国内産砂糖＝和糖問屋

#### 明治時代(開国後)

- ・香港車糖(機械製糖による精白糖)・ヨーロッパ甜菜白糖の輸入増大 → 国内砂糖産業の衰退 → 横浜・神戸を輸入港として京浜・阪神二大集散地の形成

#### IV 鈴木商店の発足

##### 辰巳屋・松原恒七

文政2(1819)年、父・松原藤助(革細工の煙草入れなどを扱う辰巳屋嘉兵衛の店の番頭)・母・なおの次男として大坂で生まれる → 父・藤助、辰巳屋の暖簾分けで、大坂・大宝寺町(大阪市中央区)に店を構え、独立(文政7年・1824年) → 恒七、家督を譲られる → 砂糖、鼈甲、象牙、珊瑚などの取引に手を広げる → 船場・長堀橋北詰に店を移転 → 神戸開港後、神戸弁天浜に出張所を開店し、砂糖の取引を行う

##### 鈴木岩治郎

- ・天保12(1841)年：武蔵国川越藩(埼玉県)の下級武士・鈴木徳治郎の次男として生まれる(7月21日)、兄・文治郎のあとを追って長崎で菓子職人の修業後、帰途、神戸に立ち寄り、江戸に帰ることを断念 → 大阪の砂糖商・辰巳屋恒七の神戸出張所に雇われる → 神戸出張所の番頭に抜擢
- ・明治7(1874)年：恒七、病に倒れ、大阪長堀の本店を女婿の藤田助七に、辰巳屋神戸出張所を岩治郎に譲る

##### 引取商としての鈴木商店の活躍 砂糖の場合

- ・ジャーディン・マセソン商会(Jardine, Matheson & Co. Ltd)、1875(明治8)年、香港にChina Sugar Refining Co.を設立 → 神戸居留地26番ブラオン商会が輸入 → 鈴木商店、大阪・藤田商店が引取り → 国内に販売 → ジャーディン・マセソン商会、居留地107番に支店を開設 → 輸入商として活動
- ・バターフィールド・エンド・スワイヤー商会(Messrs. Butterfield & Swire)、明治16(1883)年、香港にTaikoo Sugar Refining Co. Ltd.を設立 → 神戸居留地118番フィロンサー商会が輸入 → 鈴木・藤田の両辰巳屋が引取り、国内に販売 → 明治20(1887)年頃、バターフィールド・エンド・スワイヤー商会、神戸居留地103番に支店を開設、砂糖をはじめ中国・ヨーロッパの商品を輸入
- ・ヨーロッパ甜菜糖の出現 → 明治25(1892)年頃よりドイツ甜菜糖の輸入 → 神戸居留地101番シモン・エバース商会、アーレンス商会などが取り扱う → 続いてハンガリー甜菜糖、ロシア甜菜糖などが輸入 → 鈴木商店は引取商として活躍
- ・鈴木商店、居留地貿易の砂糖引取のリーダーとしての役割を担う

### 神戸石油商会の設立

- ・明治 15(1882)年、岩治郎ほか石油取引商 7 名が発起人となって、栄町 3 丁目に資本金 3 万円で設立 → 外国商の価格つり上げに対抗 → 石油タンクの設置、流通量の確保と危険の防止 → 神戸の商人が共同し、外国商人に対抗して石油の商権を獲得する道を開く

### 貿易会所副頭取などに就任

- ・貿易会所(開港以来の神戸における貿易取締機関)頭取、神戸貿易為替会社(貿易業者に対する金融を行う)社長、神戸商業会議所第 1 回議員(中上川彦次郎・川西清兵衛・瀧川弁三などとともに)
- ・明治 19(1886)年、資力 3 万円以上の神戸有力八大貿易商の一人となる(光村弥兵衛・池田清助・池田貫兵衛・山本亀太郎・高木喜右衛門・山口吉左衛門・大慈安兵衛)

### 鈴木よね

- ・明治 10(1877)年、西田よね、鈴木岩治郎に嫁す
- ・嘉永 5(1852)年、播磨国姫路米田町、塗師丹波屋・西田仲右衛門の三女として生まれる(8月15日)
- ・明治 11(1878)年：長男・徳治郎(のち岩治郎と改称)生まれる → 明治 14(1881)年、次男・米太郎生まれる、明治 17(1884)年、三男・岩蔵生まれる

### 金子直吉

- ・明治 19(1886)年、金子直吉、鈴木商店に雇われる
- ・慶應 2(1866)年、高知県吾川郡名野川村に、父甚七、母タミの長男として生まれる
- ・明治 4(1871)年、高知に移り住む
- ・明治 10(1877)年、長尾砂糖店の丁稚となる
- ・明治 13(1880)年、質商・傍士久万次の店に雇われ、のち番頭となる(質屋を廃業、砂糖店となる)

### 売込商としての鈴木商店の活動 樟脳の場合

- ・明治 23(1890)年より樟脳取引を始める → 入店間もない金子直吉が責任者となる → 国内各地の樟脳を集めて外国商人に売り捌く → 明治 28(1895)年、台湾に進出  
樟脳=クスノキの木片を水蒸気で蒸留して製造、無色透明の板状結晶となる、防虫・防臭剤、セルロイド・火薬の原料

### 鈴木岩治郎、死去

明治 27(1894)年、鈴木岩治郎、死去(6月15日)、享年 53 歳、

## V 新生・鈴木商店の誕生

### 女店主よね・番頭金子直吉体制の成立

- ・廃業か存続か 廃業して遺産 9 万円で 2 人の遺児を育てるか、年商 500 万円の会

社を存続させるか → よねの実兄西田仲右衛門・大阪辰巳屋藤田助七を後見人、長男・岩治郎、家督を相続し、よね、みずから店主となり、存続を決定 → よね＝大番頭・金子直吉体制で再出発

### 金子による樟脳先物売りの失敗

- ・樟脳 = 日本産と台湾産で世界の供給量の 80%を占める → 日清戦争(1894～95年)の勝利による台湾の割譲 → 台湾樟脳の品薄 → 価格高騰の予測 → 100 斤(60 キロ)40 円を上限と見て外国商館への先物売約 → 予想外の高騰＝70～90 円

「樟脳の暴騰—神戸港につき— 近頃樟脳相場の暴騰甚だしく昨今当港に於ける売買相場は八十円以上に昂揚せり。斯る高値は当港にて樟脳の輸出始まりし以来、多く聞かざる所なりと。暴騰の原因は品少なのためなるべしと云ふ」(神戸又新日報・明治 28 年 8 月 10 日付)

- ・鈴木破産の危機 → 外国商社と折衝 → 最大の売約先・居留地 101 番シモン・エバース商会 Simon, Evers & Co. との折衝で解決 (現物少々+4000 ドル) → 居留地 8 番オットー・ライマース商会 Otto Reimers & Co. との問題も解決 → 大阪・福永銀行とラスペ商会との仲裁に乗り出し、双方から 6000 円の謝礼を受け取る → 以後先物売買の禁止が鈴木商店の大原則となる
- ・相場高騰の原因：イギリスの相場師ノース、日本の台湾領有による樟脳の品薄を予測、世界的な買い占めを行う

### 鈴木商店の台湾進出

- ・明治 28(1895)年 8 月、台湾に進出、台湾樟脳を本格的に取り扱う基礎を築く
- ・明治 35(1902)年、鈴木商店を合名会社 (出資額 50 万円) とし、鈴木よね(出資額 48 万円)、金子・柳田 (各 1 万円) とし、よね、代表社員となる
- ・大正 12(1923)年、鈴木合名会社、組織変更、貿易部門を分離、株式会社鈴木商店 (社長鈴木よね) とし、鈴木合名会社は持株会社として存続 (代表社員鈴木よね)

## VI 総合商社への道

- ・鈴木商店による直貿易の実現
- ・明治 35(1902)年、ロンドン、ハンブルグ、ニューヨークに代理店開設
- ・明治 40 年代 (1910 年代初め)
- ・輸出入・製造販売品目の多様化：販売樟脳・樟脳油・薄荷・魚油製造輸出販売、米利堅粉・砂糖輸入販売、鑄鉄・鍛鉄・銑鉄・諸機械製造販売
- ・直営工場：6
- ・支店・出張所：2 支店 (門司・上海)、8 出張所 (東京・大阪・名古屋・小樽・函館・那覇・台南・福州)
- ・日本商業会社 (Nippon Trading Society Limited) の引き受け：資本金 50 万円、
- ・船舶部の創設：5000 トン級 4 隻、3000 トン級 3 隻

- ・海外代理店：ロンドン・ハンブルグ・ニューヨーク、外国通信部
- ・学卒者の採用：神戸高商・東京高商など

## VII おわりに

### 主要参考・引用文献

大山 梓	旧条約下に於ける開市開港の研究	鳳書房	昭和 42 年
桂 芳男	総合商社の源流 鈴木商店	日経新書	昭和 52 年
小宮由次	金子直吉 総合商社の源流「鈴木商店」を育てた巨人		平成 24 年
齋藤尚文	鈴木商店と台湾 樟脳・砂糖をめぐる人と事業	晃洋書房	平成 29 年